埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

見方・考え方を働かせる授業づくりを志向して：主体的・対話的で深い学びに結び付く教材研究のあり方

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-27 キーワード (Ja): 見方・考え方, 主体的・対話的, 深い学び キーワード (En): perspectives and way of thinking, subjective and interactive, deep learning 作成者: 小山内, 弘和, 生野, 金三 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/2000045

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.

見方・考え方を働かせる授業づくりを志向して
── 主体的・対話的で深い学びに結び付く教材研究のあり方 ──

小山内　弘　和
生　野　金　三

Ⅰ　はじめに

2016（平成 28）年に中央教育審議会は答申を発表した。そこでは，育成を目指す資質・能力についての基本的な考え方，及び資質・能力の三つの柱に基づく教育課程の枠組み等が述べられている。刮目すべきは，資質・能力についての考え方が分析されると同時に，「何ができるようになるか」という観点より「何を理解しているか，何ができるか」，「理解していること・できることをどう使うか」，「どのような社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか」の三者についての基本的な考え方とその育成の方途が詳細に亘って考察されていることである。

前回の改訂（2010〈平成 20〉年）の際にも，育成を目指す資質・能力の重要性については認識されていたが，しかし当時はまだ資質・能力の育成と子供の発達，教育課程との関連等に関する議論の蓄積が乏しく，言語活動の充実を各教科等を貫く改善の視点として掲げるにとどまっていたのである[(1)]。就中，ここではそれぞれ教えるべき内容が教科等の枠組みごとに知識や技能の内容に沿って順序立てて整理されているが，しかし一つの学びが何のためか，どのような力を育むものかについては明確になっていない[(2)]。

上記のことからも分かるように，従来においては指導の目的が「何を知っているか」にとどまり，知いていることを活用して「何ができるようになるか」まで発展していないという指摘がある。「何ができるようになるか」をめぐっては，前述の「育成を目指す資質・能力についての基本的な考え方」の項において，

・例えば国語力，数学力などのように，伝統的な教科等の枠組みを踏まえながら，社会の中で活用できる力としての在り方について論じているもの。
・例えば言語能力や情報活用能力などのように，教科等を越えた全ての学習の基盤として育まれ活用される力について論じているもの[(3)]。

とあり，必要な資質・能力が育まれ，そしてそれが教科を超えた全ての学習の基盤として活用され，現代的な課題に対応できるような力となることを願っている。

一方，後者の資質・能力の三つの柱をめぐっては，以下のように指摘する。

① 「何を理解しているか，何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」
② 「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」
③ 「どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」[(4)]。

①は，各教科等において習得する知識や技能であるが，個別の事実的な知識のみを指すものではなく，それらが相互に関連付けられ，さらに社会の中で生きて働く知識となるものを含んでいる。技能は，一定の手順や段階を追って身に付く個別の技能に加え，体得した個別の技能が他の技能と関連付けられ，新たな課題に応じて主体的に活用できる技能も含んでいる。

②は，将来の予測が困難な社会でも，未来を切り拓いていくために必要な思考力・判断力・表現力等である。思考・判断・表現の過程には，精査した情報を基に自分の考えを形成し，文章や発話によって表現したり，目的や場面，状況等に応じて互いの考えを適切に伝え合い，多様な考えを理解したり，集団としての考えを形成したりしていく過程が存在するとしている。

③は，①及び②の資質・能力を，どのような方向性で働かせて行くかを決定付ける重要な要素であり，そこには情意や態度等に関わるものが含まれる。斯様な情意や態度等を育んでいくためには，体験活動を含め，社会及び世界との関わりの中で，学んだことの意義を実感できるような学習活動を充実させることが重要であるとしている。そして，主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向う力や，自己の感情や自己の感情や行動を統制する能力等，いわゆる「メタ認知」に関するものも重要視している。ここでは，主体的協働的に問題を発見し，解決していくという学びの質の重要性を指摘している故，アクティブ・ラーニングへの転換の必要性を強調している。

以上のことから「何ができるようになるか」を明確にしながら，学びの質の向上に向けて，「どのように学ぶか」という学びの過程，つまり「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）の視点からの学習過程の改善に向けた取組を活性化していくこと求められるのである。

斯様なことを踏まえ，本論では，深い学びの実現に結び付く教材研究のあり様を志向し，その際見方・考え方を働かせるということに焦点を当てて研究を進めることにする。見方・考え方を働かせることは教科等において極めて重要視されている。それは，国語科の場合，「言葉による見

方・考え方」を働かせることが，国語科において育成する資質・能力をよりよく身に付けることにつながるからである。体育科の場合,「言葉による見方・考え方」を働かせる学習活動を工夫することにより，体育科で育成を目指す資質・能力がより豊かになるからである。

Ⅱ　教科等における見方・考え方

1　国語科における見方・考え方を働かせるとは

表 1　小学校国語科　学習指導要領新旧対照表

2008（平成 20）年	2017（平成 29）年
第１　目標 国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し，伝え合う力を高めるとともに，思考力や想像力及び言語感覚を養い，国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。	第１　目標 言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。 ⑴　日常生活に必要な国語ついて，その特質を理解し適切に使うことができるようにする。 ⑵　日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め，思考力や想像力を養う。 ⑶　言葉がもつよさを認識するとともに，言語感覚を養い，国語の大切さを自覚し，国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。
第２　各学年の目標及び内容 〔第１学年及び２学年〕 1　目標 ⑴　相手に応じ，身近なことなどについて，事柄の順序を考えながら話す能力，大事なことを落とさないように聞く能力，話題に沿って話し合う能力を身に付けさせるとともに，進んで話したり聞いたりしようとする態度を育てる。 ⑵　経験したことや想像したことなどについて，順序を整理し，簡単な構成を考えて文や文章を書く能力を身に付けさせるとともに，進んで書こうとする態度を育てる。 ⑶　書かれている事柄の順序や場面の様子などに気付いたり，想像を広げたりしながら読む能力を身に付けさせるとともに楽しんで読書しようとする態度を育てる。	第２　各学年の目標及び内容 〔第１学年及び２学年〕 1　目標 ⑴　日常生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに，我が国の言語文化に親しんだり理解したりすることができるようにする。 ⑵　順序立てて考える力や感じたり想像したりする力を養い，日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め，自分の思いや考えをもつことができるようにする。 ⑶　言葉がもつよさを感じるとともに，楽しんで読書をし，国語を大切にして，思いや考えを伝合おうとする態度を養う。

2017（平成 29）年の⑴は,「知識・技能」の目標。⑵は,「思考力・判断力・表現力等」の目標。⑶は,「学びに向かう力・人間性等」の目標。

言葉による見方・考え方を働かせるとは，児童が学習の中で，対象と言葉，言葉と言葉との関係を，言葉の意味，働き，使い方等に着目して捉えたり，問い直したりして，言葉への自覚を高めることであると考えられる。様々な事象の内容を自然科学や社会科学等の視点から理解することを直接の学習目的としない国語科においては，言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象としている。このため，「言葉による見方・考え方」を働かせることが，国語科において育成を目指す資質・能力をよりよく身に付けることにつながることとなる。また，言語能力を育成する中心的な役割を担う国語科においては，言語活動を通して資質・能力を育成する。言語活動を通して，国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成するとしているのは，この考え方を示したものである。

2　体育科における見方・考え方を働かせるとは

表 2　小学校体育科　学習指導要領新旧対照表

2008（平成 20）年	2017（平成 29）年
第１　目標 心と体を一体としてとらえ，適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して，生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに健康の保持増進と体力の向上を図り，楽しく明るい生活を営む態度を育てる。	第１　目標 体育や保健の見方・考え方を働かせ，課題を見付け，その解決に向けた学習過程を通して，心と体を一体として捉え，生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。 ⑴　その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解するとともに，基本的な動きや技能を身に付けるようにする。 ⑵　運動や健康についての自己の課題を見付け，その解決に向けて思考し判断するとともに，他者に伝える力を養う。 ⑶　運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し，楽しく明るい生活を営む態度を養う。
第２　各学年の目標及び内容 〔第５学年及び第６学年〕 １　目標 ⑴　活動を工夫して各種の運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにするとともに，その特性に応じた基本的な技能を身に付け，体力を高める。	第２　各学年の目標及び内容 〔第５学年及び第６学年〕 １　目標 ⑴　各種の運動の楽しさや喜びを味わい，その行い方及び心の健康やけがの防止，病気の予防について理解するとともに，各種の運動の特性に応じた基本的な技能及び健康で安全な生活を営むための技能を身に付けるようにする。

⑵　協力，公正などの態度を育てるとともに，健康・安全に留意し，自己の最善を尽くして運動をする態度を育てる。	⑵　自己やグループの運動の課題や身近な健康に関わる課題を見付け，その解決のための方法や活動を工夫するとともに，自己や仲間の考えたことを他者に伝える力を養う。
⑶　心の健康，けがの防止及び病気の予防について理解できるようにし，健康で安全な生活を営む資質や能力を育てる。	⑶　各種の運動に積極的に取り組み，約束を守り助け合って運動をしたり，仲間の考えや取組を認めたり，場や用具の安全に留意したりし，自己の最善を尽くして運動をする態度を養う。また，健康・安全の大切さに気付き，自己の健康の保持増進や回復に進んで取り組む態度を養う。

2017（平成 29）年の⑴は，「知識・技能」の目標。⑵は，「思考力・判断力・表現力等」の目標。⑶は，「学びに向かう力・人間性等」の目標。

体育の見方・考え方とは，「運動やスポーツを，その価値や特性に着目して，楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え，自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」である[(5)]。児童が，運動やスポーツを「する」ことで，楽しさや喜びを味わったり，それが体力の向上につながったりするなどが一つの要素である。加えて，その価値や特性を実践するだけではなく，自分の適性等に合わせて，「見る」，「支える」，「しる」などからも，運動やスポーツの価値や特性との多様な関わり方があることを考えられるように示されたものと考えられる。

保健の見方・考え方とは，「個人及び社会生活における課題や情報を，健康や安全に関する原則や概念に着目して捉え，疾病等のリスクの軽減や生活の質の向上，健康を支える環境作りと関連づけること」である[(5)]。児童が，自分の身近な生活で関わりのある，病気にかかったりけがをしたりするなどのリスクの軽減や心身の健康の保持増進のために，自分の生活における課題や情報と保健領域で学習する病気の予防やけがの手当ての原則，健康で安全な生活についての概念を結び付けて考えられるように示されたものと考えられる。

体育では，「見方・考え方」を工夫した学習過程で実施することにより，より豊かな資質・能力を獲得することに繋がると考える。その中で運動領域では，運動やスポーツの特性や魅力，楽しさや喜びを実感したりしながら多様性に富んだ人々との関りの重要性を認識することが求められていると考える。また，保健領域では，現代的な健康課題や健康情報の容易な入手など，環境が大きな変化の中にある。その中において，児童が主体的に正しい健康情報選択，健康課題の適切な解決を行っていくことができるようになることが求められていると考えられる。

Ⅲ　見方・考え方を働かせる教材研究

1　国語科の場合

(1)　教材「手ぶくろを買いに」の研究

まず，言葉と言葉のとの関係という観点より１の場面の内容を見てみる。

①さむい冬が，北方から，きつねの親子のすんでいる森へもやってきました。②ある朝，ほらあなから，子どものきつねが外に出ようとしましたが，「あっ。」とさけんで，目をおさえながら，母さんぎつねの所へ転げてきました。③「母ちゃん，目に何かささった。ぬいてちょうだい。早く，早く。」と言いました。④母さんきつねがびっくりして，あわてふためきながら，目をおさえている子どもの手を，おそるおそる取りのけてみましたが，何もささっていませんでした。……⑥さく夜のうちに，まっ白な雪が，どっさりふったのです。⑦その雪の上からお日様がきらきらとてらしていたので，雪はまぶしいほど反しゃしていたのです。⑧雪を知らなかった子どものきつねは，あまり強い反しゃを受けたので，目に何かささったと思ったのでした。⑨子どものきつねは，遊びに行きました。⑩まわたのようにやわらかい雪の上をかけ回ると，雪の粉が，しぶきのようにとびちって，小さいにじがすっとうつるのでした。⑪すると，とつぜん，後ろで，ドタバタ，ザーッと，ものすごい音がして，パン粉のような粉雪が，ふわあっと子ぎつねおかぶさってきました。⑫子ぎつねはびっくりして，雪の中に転がるようにして，十メートルも向こうへにげました。⑬なんだろうと思って，ふり返ってみましたが，何もいませんでした。⑭もみのえだから，雪がなだれ落ちたのでした。⑮まだ，えだとえだの間から，白いきぬ糸のように雪がこぼれていました。⑯間もなく，ほらあなへ帰ってきた子ぎつねは，「お母ちゃん，おててがつめたい，おててがちんちんする。」と言いて，ぬれてぼたん色になった両手を，母さんぎつねの前にさし出しました。⑰母さんぎつねは，その手に，はあっと息を吹きかけて，ぬくとい母さんの手で，やんわりつつんでやりながら，「もうすぐ，あたたかくなるよ。雪にさわると，すぐにあたたかくなるもんだよ。」と言いましたが，かわいいぼうやの手にしもやけができてはかわいそうだから，夜になったら，町まで行って，ぼうやのおててに合うような毛糸の手ぶくろを買ってやろうと思いました。

①の文の冒頭の部分に目を転じてみると，そこでは，寒い冬が北方の方から森へのやってきましたとあり，かじかむような冬の厳しい寒さの世界を想像する。しかし，その後の展開に目を転じてみると，全体的には何となくほのぼのとした暖かい感じを受ける。それは，詩的情景の美しさと暖かさ，子どものきつねの可愛らしさと無邪気さ，母きつねの優しさ等の内容に起因する。

以下に具体的叙述を基に考察を加える。就中，言葉と言葉との関係を言葉の意味，働き，使い方等の観点より見てみる。

○【詩的情景の美しさと暖かさ】（1の場面における）

雪は，白く冷たい感じのするものであるが，「⑩まわたのようにやわらかい雪」，「⑪パン粉のような粉雪」，「⑮白いきぬ糸のように雪」等の言葉よりほとんど冷たいと言った感じがしないのである。雪を「まわた」，「パン粉」，「白いきぬ糸」等の比喩を使って情景を美しく描写している。そして，これらの比喩的表現によって，明るい，柔らかい，暖かい世界観を醸成している。この比喩的情景，雪景色（⑥まっ白な雪……雪の上からお日様がきらきらとてらしていた）のファンタスチックな場面等によってメルヘン的世界が描写されているのである。また，暖かさとい点で見ると，母さんきつねの愛情がよく出ている叙述が認められる。それは，「⑰はあっと息を吹きかけて，ぬくとい母さんの手でやんわり包んでやりながら……かわいいぼうやの手にしもやけができてはかわいそう」という叙述である。両手がぬれてぼたん色になっている子ぎつねの手を見たとき，母さんぎつねは，ぬくとい手でやんわり包み込んでやるのである。「ぬくとい」という言葉は，他の言葉に置き換えられない「あたたかみ」を感じさせてくれる。これと「やんわり」とが相まって，ここでは母ぎつねの子ぎつねを思う暖かさ，人物像が浮き彫りにされている。斯様なことから①の文より⑩の文では，場面の暖かさやメルヘン性が認められる。

①の文を基盤に据え，それと⑨と⑪の文，さらに⑥の文，⑰の文等の重要語句に着目して言葉と言葉との関係性を問い直すことよって，初めて雪に接した子ぎつねの驚きや喜び，そして母ぎつねの愛情を読み取ることが可能となる。斯様に言葉による見方・考え方を働かせる教材研究が，延いては国語科で育成を目指す資質・能力をよりよく身に付けることに結び付くのである。

○【子どものきつねの可愛らしさとと無邪気さ】（1，2，3の場面より）

先の場面の⑯の文「おててがつめたい，おててがちんちんする。」の類似した繰り返しの表現からは，子ぎつねのあどけなさ，幼さが分かる。「おてて」という幼児語からもそのことは窺い知ることができよう。これは，母ぎつねに甘える子ぎつねの姿であるが，その後の叙述に目を転じてみると，子ぎつねをいたわる母ぎつね，その母子の愛情が丁寧な表現によって一層深められていく。具現すれば，「⑰母さんぎつねは，その手に，はあっと息を吹きかけて」，2の場面の「②……お母さんのおなかの下へ入り込んで，……あっちやこっち」等の叙述からも，そのことは理解できよう。前者の⑰の文には，母さんぎつねの愛情がよく出ている。母さんぎつねはどうすれば冷たい手を温かくできるかを経験上から知っている。また，強い冷たさを感じた後は，それと逆に温かなほてった感じになることも経験上知っている。一方，後者の②の文には，初めて見る冬の夜の銀世界の様相を見る驚きや珍しさが描写されている。「あっちやこっち」という叙述からは，子ぎつねが時間をかけて夜の銀世界を見ている姿が想像できる。

3の場面
⑩子ぎつねは，その光がまばゆかったので，面くらって，まちがったほうの手を，――お母さんが，出しちゃいけないと言ってよく聞かせたほうの手を，すき間からさしこんでしまいました。⑪「このおててにちょうどいい手ぶくろ，ください。」⑫すると，ぼうし屋さんは，おやおやと思いました。⑬きつねの手です。⑭ねの手が，手ぶくろをくれと言うのです。これはきっと，木の葉で買いに来たんだな思いました。⑮そこで，「先にお金をください。」と言いました。⑯子ぎつねは，すなおに，にぎってきた白どうかを二つ，ぼうし屋さんにわたしました。

子ぎつねは，「⑩まちがったほうの手を」差し込んでしまう。子ぎつねは，「⑩お母さんが，出しちゃいけないと言ってよく聞かせたほうの手を，すき間からさしこんでしま」ったのである。子ぎつねは，開けた戸からもれてきた光のまぶしさに面食らって，思わず反対の手を差し出してしまう。ここには，純真で警戒心のない子ぎつねの姿が見られる。⑪「このおてて」とは，間違って出したきつねの方の手のことである。これに対して，帽子屋さんは，「おやおや」と思い，「先にお金をください。」と言う。そして，子ぎつねは，少しも疑うことなく「⑯すなおに，にぎってきた白どうかを二つ，ぼうし屋さんにわた」すのである。子ぎつねは，飽くまでも純真で，警戒心もなく，素直である。

⑯の文を基盤に据え，子ぎつねの様相を見てきた。⑯の文と関わりのある⑰の文，②の場面の②の文，さらには3の場面の⑩の文，⑯の文等の重要語句に着目して言葉と言葉との関係性，言葉と言葉との結合能力等を見ていくことによって，子どものきつねの可愛らしさと無邪気さ等について読み取ることが可能となる。斯様なことから「すなお」になれる子ぎつねからは，悪い因果から離れて，善意を引き出せるのである。

○【母きつねの優しさ】

1の場面
⑰母さんぎつねは，その手に，はあっと息をふきかけて，ぬくとい母さんの手で，やんわりつつんでやりながら，「もうすぐ，あたたかくなるよ。雪にさわると，すぐあたたかくなるもんだよ。」と言いましたが，かわいいぼうやの手にしもやけができてはかわいそうだから，夜になったら，町まで行って，ぼうやのおててに合うような手ぶくろを買ってやろうと思いました。

⑰の文には，先述のごとく母さんぎつねの愛情がよく出ている。母さんぎつねは，ぬくとい手でやんわりつつんでやるという，まず直接的な行為で，子ぎつねに対処している。その愛情には，

「⑰雪にさわると，すぐあたたかくなるもんだよ。」と，大人の知恵を授けている。それだけでは心配で，「⑰夜になったら，町まで行って，手ぶくろを買ってやろう」と思ったのである。ここには，用心深い母きつねの思いが存在する。母性愛の強い母ぎつねである。

4の場面
⑪それを聞くと子ぎつねは，きゅうにお母さんがこいしくなって，母さんぎつねの待っている方へどんで行きました。

人間の母の声で「⑩森の子ぎつねも，お母さんのお歌を聞いて，ほらあなの中でねむろうとしているでしょうね。」という言葉が窓の外を通りがかった子ぎつねに聞こえてくる。それを聞いた子ぎつねは，「⑪きゅうにお母さんがこいしくな」り，とんで帰っていく。誰でも子供の頃，母親から何かの気の進まない用事を言いつけられて，帰りが夜になってしまったというような経験がある。そんな折り，途中でよその家の平和で楽しそうな夕餉の様子などを見て，よそのうちのお母さんはなんて優しそうなんだろうと思う。そう思うと，急に涙がこみ上げてきて，一目散にかけ出して帰る。母を思う情こそ，子供として，人間として本質であろう。母ぎつねは，子供を守り抜くための，限りない愛情で包み込んでいる。

5の場面
①母さんぎつねは，心配しながら，ぼうやのきつねの帰ってくるのを，今か今かと，ふるえながら待っていましたので，ぼうやが来ると，あたたかいむねにだきしめてなきたいほどよろこびました。

①の文には，子ぎつねの身を案じる母ぎつねの様子が叙述されている。「①ふるえながら」とは，寒さのためだけでなく，心配のためでもある。その心配が大きかっただけに，子ぎつねが帰ってきたときの母さんぎつねの喜びも大きいのである。喜ぶ母ぎつねの姿の中には，人間としての偽りのない美しさを典型として垣間見ることができよう。

⑰の文を基盤に据え，母きつねの優しさの様相を見てきた。4の場面の⑪文，5の場面の①の文等の重要語句に着目して言葉と言葉との関係性，言葉の存在等を見ていくことによって，母ぎつねの優しさが浮き彫りにされてくる。斯様の読みが，前述のごとく言葉による見方・考え方を働かせ教材研究であり，それが延いては国語科で育成を目指す資質・能力をよりよく身に付けることに結び付くのである。

(2)　教材「ごんぎつね」の研究

(1) の場面における言葉と言葉との関係

3の場面 ⑬ごんは，うなぎのつぐないに，まず一つ，いいことをしたと思いました。⑭次の日には，ごんは出てくりをどっさり拾って，それをかかえて兵十のうちへ行きました。

3の場面において深い学びを行うに当たっては，1と2の場面の叙述を踏まえて，つまり1と2の場面におけるごんの言動との関わりを捉えて読みを展開していくことが重要である，まず，⑬の「ごんは，うなぎのつぐないに，まず一つ，いいことをしたと思いました。」という叙述に着目してみる。ここに，「まず」とあるが，これは「いくつかの事例，事物の中から，最も可能性のたかいもの，最も要求するもの，最も必要とされるものを第一に取り立てる気持ち」の意である。このことを踏まえて，⑬の文に目を転じてみると，ここではごんが己の行為を回顧し，そしてそれを評価し，と同時に今後も償っていくことの決意を読み取ることでできる。

ごんが己の行為を回顧し，そして今後も償っていく決意をした背景には，どのようなことが存在したのだろう。それに当たっては，1の場面及び2の場面のごんの言動に着目することである。

1の場面 ⑤そして，夜でも昼でも，辺りの村へ出てきて，いたずらばかりしました。⑥畑へ入っていもをほり散らしたり，菜種がらのほしてあるのへ火をつけたり，百姓家のうらてにつるしてあるとんがらしをむしり取っていったり，いろいろなことをしました。……㊴ごんはほっとして，うなぎの頭をかみくだき，やっと外して，あなの外の草の上にのせておきました。

まず，1の場面の⑤，⑥，㊴の文に目を転じてみると，⑤と⑥の文には，ごんの悪戯の様相が描かれている。⑤の文は，悪戯の抽象的，上位的概念であり，そして⑥の文は，悪戯の具体的，下位的概念である。⑥の文からは，ごんの酷い悪戯の様相が分かる。⑤と⑥の文の内容を踏まえて，㊴の文に目を転じて見ると，そこでは鰻の処置をめぐって二つのことが叙述されているが，そのことは取りも直さずごんの性格の二面を顕わにしていることである。前述の㊴「ごんはほっとして，うなぎの頭をかみくだ」くからは，獣性のもつごんの残忍さを容易に想像できる。ここからは，ごんは鰻の死骸を当然その辺りに無造作に投げ捨てるであろうという予測が付くのである。しかし，ごんはそのようなことはせず鰻の死骸を草の上に乗せて置くのである。㊴「あなの外の草の上にのせてお」く行為は，丁寧でなければならない。「のせてお」くという叙述によって，㊴の文には，獣性と隣り合わせにもっているごんのいじらしさや優しさを感じ取ることができる。

先述の㊴の文を念頭に置いて，2の場面の㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛（割愛）のごんの独白を見てみる。兵十のおっ母の葬式が終わった夜，ごんは穴の中でおっ母の死についていろいろ思索をめぐらすのである。ここでは，主人公ごんの心の変容が読み取れる。ごんの独白からは，己の悪戯が今は亡き兵十のおっ母に結び付き，自責の念にかられていることが分かる。兵十にとっては，おっ母の死が相当辛かったと思う。こうしたごんの思いが兵十への償いを始める契機となるのである。斯様なことを念頭に置いて，3の場面の⑬の文に転じてみると，ここではごんが己の行為を回顧し，そしてそれを評価し，と同時に今後も償っていくという決意を読み取ることができる。ごんは鰻の償いに兵十の家に持っていったことが余程嬉しかったとみえる。それで，（⑭次の日には，ごんは山でくりをどっさり拾って，それをかかえて兵十のうちへ）行ったのである。ここでは，前述の「⑬いいことをした。」という満足感に浸りながら山で栗をとてもたくさん拾って，そしてそれを両手で抱えて喜び勇んで兵十の家へ行く姿が想像できるのである。とても晴れやかな姿のごんである。

以上，3の場面の読みを深めるに当たって，まず1の場面におけるごんの性格（㊴獣性と隣り合わせにもっているごんのいじらしさや優しさ），就中「ごんのいじらしさや優しさ」を踏まえ，そしてその性格の一端が顕在化されているごん独白（2の場面の㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛）の様相を具体的に探った。ごんの独白からは，己の悪戯が今はなき兵十のおっ母に結び付き，自責の念にかられているごんの心根の優しさが顕わになった。こうしたごんの思いが兵十への償いを始める契機となるのである。そして，3の場面（⑬）において，ごんは己の行為を回顧し，そしてそれを評価し，と同時に今後も償っていくという決意に至るのである。斯様に言葉の存在に着目し，言葉と言葉との関係性を問い直して意味付けることによって深い学びに結び付く教材研究が可能になるのである。

2　体育科の場合

教材「補助逆上がり」の研究

補助逆上がりは，小学校中学年に行われる器械運動内の鉄棒運動に分類される運動である。鉄棒運動は，回転，支持，逆さ姿勢，ぶら下がり，振動などで構成された技を基に，様々な遊びや動きを工夫して取り組んだり，自己の能力に適した技や発展技に挑戦したりして技を身に付けたときに楽しさや喜びを味わうことのできる運動である[(6)]。同様の運動系として低学年では固定遊具を使った運動遊びや鉄棒を使った運動遊びとして取り上げられている。鉄棒運動を含む器械運動系は動作の可否が明確となることから，各自やグループでの課題を見つけ解決する方法を検討し，練習の方法や段階を工夫しながら進めるなどが必要である。

補助逆上がりは，後転系の技でかつ上り技である。踏み蹴りから腹を鉄棒に掛けて後ろに回る

後転グループ技である逆上がりを，図１のような補助具を使用して実践する。小学校指導要領解説書　体育編内の例示では「補助や補助具を利用した易しい条件の基で，足の振り上げとともに腕を曲げ上体を後方へ倒し，手首を返して鉄棒に上がること。」[7] と示されている。前転系の技のように飛び上がりで鉄棒に上った状態から行える比較的簡単な技とは異なり，難易度は格段に上昇するものとなる。発展技として小学校高学年に取り上げる逆上がりがある。

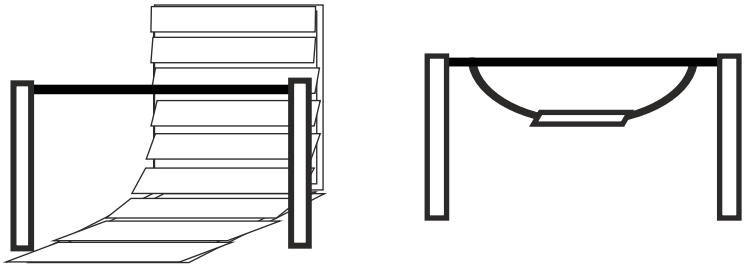

図１　逆上がり補助具の例

(1) 補助逆上がりを見る，知るとともに「どのような技か？」を思考し，検討する。

・補助逆上がりという言葉からどのような技なのかを推測や経験から思考するとともに，ICT を用いて検索してみる。その際，補助具についても思考，検索し，映像などを視聴し，どのような技であるかを確認する。

・確認した補助逆上がりが，どのような動きが含まれており，どのような動きをすることで遂行できるかを各自で思考し，グループで検討する。その際，複数の補助具をヒントにどのような動きが必要になるかを検討するように促す。

中央教育審議会において体育の主体的な学びは「運動の楽しさや健康の意義等を発見し，運動や健康についての興味や関心を高め，課題の解決に向けて粘り強く自ら取り組み，それを考察するとともに学習を振り返り，課題を修正したり新たな課題を設定したりする学びの過程と捉えられる。」としている[8]。体育の学習においては，単純な動作を学習し獲得することを積み重ね（スモールステップ），身につけた動作を組み合わせることで目的とする活動を遂行することができるようになっていることは授業展開の方法の一つである。しかし，目標となる活動や技を全く知らずに必要動作を身につけていく過程はラーニングよりトレーニングと成りやすい。鉄棒運動は非日常的な単純な活動の組み合わせから成り立っていること，また，体育の見方・考え方，主体的な学びを鑑みると，興味，関心を高めるためにも補助逆上がりという最終課題を知り明確なイメージを持った上で学習を進めていくことが，児童の学習へのモチベーションを獲得しやすい。最終的なイメージへ向かいながら，各自，グループなどで課題を発見

し修正する方法で展開することにより，主体的な学びへ結びつきやすいと考える。このことから，まずは補助逆上がりの活動がどのような活動なのかを知ることから学習を始めていく。

補助逆上がりの活動を知るに当たり，図１に示したように補助逆上がりに必要な補助具は複数ある。教師から限られた補助具を提示された場合，提示されたものに固執することが予想される。複数の補助具や補助の方法を自らICTを用いて検索し知ることは，補助逆上がりを行う上で強い興味関心を獲得する方法の一つである。さらに補助具によりその効果が異なることを用いて，どのような動きを補うために補助具があるのかを予想させることで補助逆上がりに深い思考で向かうことができると考える。

(2) 補助逆上がりを実践してみて，思考，検討した内容との確認を図る。

・確認した補助逆上がりのイメージを元に，補助逆上がりを実践してみる。その際，互いに動きを見合うとともにPCなどで映像に記録し，イメージと自分自身や他者の動きを確認するようにする。
・実践の際には，補助具の効果を確認しながらできるように，さまざまな補助具を使用できるようにするように工夫すると良い。
・実践の結果，(1) で思考，検討した内容と比較し，正しい内容や異なった内容を確認する。
・実践から確認した内容をグループで再度検討するとともに，全体でも検討しまとめてみる。
・再確認した動きを元に，過去に学習した類似した動きを探してみる。
・再確認した動きや類似した動きを元に，どのような練習が有効かを思考しグループで検討する。

(1) で挙げた主体的な学びに加え，中教審では対話的な学びを必要としている。体育での対話的な学びとしては，「運動や健康についての課題の解決に向けて，児童生徒が他者（書物等を含む）との対話を通して，自己の思考を広げ深めていく学びの過程」としている[(8)]。体育の実践において自己の動きの映像記録は振り返りや確認のために貴重な資料である。また，他者との比較を視覚的に確認できる資料でもある。個人のイメージのみではなく，映像記録から自己の試行を確認する，また他者との比較を行うことで，個人の思考内のみではなく思考を広げることができる。さらに，グループ内での検討したものを全体でまとめることにより，さらに深い思考へと繋がる。

中教審答申では「基礎的・基本的な知識を着実に習得しながら，既存の知識と関連付けたり組み合わせたりしていくことにより，学習内容（特に主要な概念に関するもの）の深い理解と，個別の知識の定着を図る」としている[(9)]。過去の類似した動きを探すことについては，小学校低学年において器械器具を使っての運動遊びとして，固定遊具を使った運動遊び，マットを使った運動遊びや鉄棒を使った運動遊びが設定されている。懸垂運動，逆さ姿勢，いろいろな方向への回

転，ぶら下がり，振動や両手でぶら下がって足抜き回りなどが内容として設けられている。これらの学習内容は補助逆上がりと似た動きが含まれている。習得した学習内容を活用し結び付けることでより深い学びに進めるためにも，過去の復習をすることが重要である。それらを動員しながら補助逆上がりを完成へと導くようにすることで技能が定着していくものと考える。

(3) 検討した練習内容を実践し，補助逆上がりの達成につなげる。

・(2) で検討した練習内容を用いながら，自分に必要な練習を選択し実践する。その際，ペアやグループで映像記録と確認，検討を行いながら，イメージした動きに近づくように促す。

・自己の活動を確認し課題を見つけながら解決への練習を進める。課題発見や解決への練習では自分自身の分析のみではなく，他者からの意見へも耳を傾けより広い思考を持つように促す。また，自身も他者への意見を発表することでより深い学びに繋げる。

・意識した動きを大切にしながら，補助逆上がりを発表する。

体育の深い学びの視点として,「自他の運動や健康についての課題を発見し，解決に向けて試行錯誤を重ねながら，思考を深め，よりよく解決する学びの過程」としている[(10)]。これまで検討してきた内容を元に練習を進めていき，その中から新たな課題を発見し課題を解決するような練習，スモールステップの課題を積み重ねるように心がけていくことが重要である。また，自己分析のみではなく，他者からや他者への分析により自己の試行や思考がより深まっていく。それを繰り返し自分自身が求めるイメージへ近づける作業を進めていくことでより深い学びに繋がる。

Ⅳ　おわりに

本論は，標題に示した如く「見方・考え方を働かせる授業づくりを志向して　―　対話的で深い学びに結び付く教材研究のあり様　―」の第一報である。現在の小学校学習指導要領（平成 29 年改訂『学習指導要領』）においては，見方・考え方を働かせることは教科等において極めて重要視されている。その見方・考え方を働かせた学習を展開するに当たっては，主体的・対話的な深い学びに結び付けていくことが必要となる。それは各科で目指す資質・能力をより豊かなものにする。本論ではそれらの実現に結び付く教材研究のあり様を志向し，その際見方・考え方を働かせるということに焦点を当てて研究を進めた。見方・考え方を働かせた学習を主体的・対話的な学びとして進めていく方法は多数存在する。児童が教材に対していかに興味・関心を持ち，自ら学びに進もうとする意欲を引き出せるかが大きな鍵となる。教師の腕の見せ所といったところであり，様々な工夫とともに児童にしっかりと目を向けていく必要があり，教師の助言が主体的で対話的な学習を加速させる。その中で学習の獲得と定着を進めさせることができたならば，より深い学びに着実に繋がっていくものと思われる。今回は，斯様な内容について研究を進めてき

たが，今後は教材研究の成果を基に実践的に探っていくことが課題であろう。この課題をめぐっては，稿を改めて論じることにする。

《注》

（1）　中央教育審議会　答申　2016（平成 28）年　p. 15 参照
（2）　同上書　p. 15
（3）　同上書　p. 27
（4）　同上書　pp. 28-30
（5）　小学校学習指導要領解説　体育編　p. 19
（6）　同上書　p. 28
（7）　同上書　pp. 82-83
（8）　中央教育審議会　答申　2016（平成 28）年　p. 191
（9）　同上書　p. 29
（10）　同上書　p. 192

（提出日：2023 年 9 月 6 日）